

4. 「大形礫」の性状とその採取地の推定

飯島 静男

三和工業団地 I 遺跡より出土した「大形礫」は淡黄灰白色のデイサイトである。風化面は黄褐色がやや濃く、角閃石斑晶が目立つので、肉眼では角閃石安山岩かと思われた。しかし新鮮な破断面では、より白色に近く、デイサイトとすべきであろう。多孔質で径 1~3 mm 内外の孔隙に富み、軽石に近い。

鏡下では斑晶として斜長石、普通角閃石、しそ輝石がみられる。斜長石は径 1~2 mm、自形であるが、中には輪郭がやや不明瞭なものがあり、そのようなものは細かい虫食い状ないし角がとれた丸味をおびている。累帯構造を呈するものが多く、しばしば帶に沿って微細な含有物が含まれる。双晶は比較的単純なものと、複雑なものと両方がみられる。斜長石は比較的多い。普通角閃石は長径 1~2 mm が普通であるが、大きいものは 3 mm に達する。自形ないし半自形、色は褐色のものと青緑色のものとがある。オパサイト化は認められない。普通角閃石の量は少なく、数% 以下であろう。しそ輝石は目立たないが、普通角閃石と同じくらい含まれる。径 1 mm 内外の自形で、比較的新鮮である。石基はガラス質の地に斜長石、角閃石、輝石および不透明鉱物の微斑晶が散在する。

三和工業団地 I 遺跡の周辺で「大形礫」のような大きい岩は赤城山南麓の流れ山にみられる。そこで付近の流れ山いくつかについて、同種の岩石があるかどうか概査したが、みられなかった。赤堀町五目牛の堂山（遺跡の西北西約 1.5 km）には北面に小露頭があって、中粒緻密の輝石安山岩、やや細粒緻密の輝石安山岩など 2~3 種類の輝石安山岩がみられる。同じく五目牛の地蔵山（遺跡の西南西約 2 km）には露頭はなく、堂山と同種のものに加え、さらに 2~3 種類の安山岩類が山体の各所に点在している。赤堀町下触の石山には多孔質の輝石デイサイトの岩塊が多数山頂部に露出しているが、角閃石を含むものはみられない。前橋市東大室の通称多田山一帯には自然の露岩はほとんどない。発掘調査によって露出した岩塊があったが、それは中粒の輝石安山岩である。多田山の西側基部には雑多な礫を含む泥流性堆積物が露出しているが、角閃石を含むデイサイトはみられない。粕川上流の赤堀町西野の西野神社のある小丘（153.2 m 三角点）およびその北東の通称峯岸山などにみられるのも、中粒の輝石安山岩である。このほか筆者のかつての調査では東大室町周辺の二子山、産泰神社、七ツ石などには輝石安山岩が分布している。

五目牛橋付近の粕川の川原には、「大形礫」と同種の岩石が少量ながらみられる。この付近の川床礫は大きさがせいぜい 30~40 cm までで、普通の洪水でもたらされる礫の大きさの上限を示している。角閃石を含むデイサイトの最大径も 30 cm 程度である。

考察

以上のごとく遺跡近傍の流れ山にはおもに輝石安山岩がみられ、角閃石を含むデイサイトはない。しかし一方で、堂山にみられる安山岩が多種類であることや、多田山に泥流性堆積物がみられるなどの点はいちおう考慮すべきであろう。

現在みられる川原の状況からは、「大形礫」サイズの岩塊は採取不可能であるが、規模の大きな土石流によつて、1 m 級の大塊がもたらされる可能性はある。

したがって「大形礫」が人為的に運ばれてきたとした場合、その採取地の候補として、1. 地蔵山など多種類の安山岩塊のみられる流れ山、2. 粕川の川原などがあげられる。しかし、現在、同種岩石の大きい岩塊がみられるところは付近にはない。